

失題（勝海舟）

多年の 蹤跡 埃塵に 没し

揣摩の 心情 天真を 思う

華屋 美なりと 雖も 是れ 浮榮

富は 泡沫の 如く 名は 烟の 如し

笑って 看る 江山の 依然として 碧なるを

行蔵 豈 亦人に 関せんや

風は 敗葉を 捲いて 夜 寂々

嘯響 凜然として 一劍 寒し

多年蹤跡没埃塵 揣摩心情思天真
華屋雖美是浮榮 富如泡沫名如烟
笑看江山依然碧 行蔵豈亦關于人
風捲敗葉夜寂寂 嘯響凜然一劍寒

解説 自分の心情を詠った詩。

語釈 ※失題Ⅱ特に題をつけない詩。※蹤跡Ⅱ事が行われたあと。足跡。
※埃塵Ⅱ塵と埃。世間。※揣摩Ⅱ推測すること。※天真Ⅱ天から与えられた清
らかでまじりけがないこと。※華屋Ⅱ豪華な家。※浮榮Ⅱはかない榮誉。
※行蔵Ⅱ隠れて世に出ないこと。※豈亦Ⅱどうして……であろうか。いやない。
※敗葉Ⅱ落ち葉。枯れ葉。※嘯響Ⅱ詩を詠ずる声、またその響き。

通釈 官途より退いて長い歳月が過ぎ、自分のこれまでの足跡は全く世間の中
に埋没してしまったが、今、自分の心情を推測すると、いつも清らかな心を持
ち続けたいと思っている。大体豪華な家を構えても、それははかない榮誉に過
ぎないし、富は水の泡のようなものであり、名声も煙のようにはかなく消え去
るものである。それに比べ、自然の山河が昔ながらに碧の色をたたえているの
を嬉しく笑って見るにつけ、自分が隠れて世に出ないことにせよ、それは人間
社会と関係があるわけではない。外は風が落ち葉を巻き上げて、夜は静かに更
けていくが、この時、好きな詩を詠ずると、凜然となり、我が劍を抜くと氷の
ように冷たく心がひきしまる思いである。